

# 看護学士課程におけるOSCE活用の現状と課題に関する文献検討

梶原 理絵, 中西 純子

愛媛県立医療技術大学紀要 第8巻 第1号抜粋

2011年12月



## 看護学士課程における OSCE 活用の現状と課題に関する文献検討

梶原 理絵\*, 中西 純子\*

### Literature Review of the Utilization of Objective Structured Clinical Examinations in Undergraduate Nursing Education

Rie KAJIWARA, Junko NAKANISHI

Key Words : OSCE 客観的臨床能力試験 看護教育 学士課程

#### 序 文

近年、医療系教育で臨床能力技能を適正に評価するための方法として有効とされている OSCE : Objective Structured Clinical Examination は、日本では 1995 年以降にほとんどの医学教育に導入されてきた。伴らは、「OSCE は、認知領域 (知識) だけでなく、精神運動領域 (技能) と情意領域 (態度) の評価が可能であるが、なかでも精神運動領域の評価法として画期的な方法である」と述べている<sup>1)</sup>。

文部科学省による「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」の最終報告 (平成 23 年 3 月 11 日) では、看護実践能力の養成における課題として、「看護師等にはこれまで以上に高い能力が求められ、学習環境も大きく変化する中、看護学基礎カリキュラムの在り方、そして、臨地実習の在り方等の検討も必要になっているなど、学士課程における看護系人材養成の在り方について全体的な見直しが求められている」と報告されている<sup>2)</sup>。

このような状況を受け、本学においても客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination : 以下 OSCE) 等の導入の是非について検討するため、その基礎的資料として、看護学士課程における OSCE 活用の現状と課題について分析することとした。

#### 目 的

日本の看護学士課程における OSCE を活用した教育方法について文献検討を行い、現状と課題を明らかにする。

#### 方 法

##### 1. 文献の抽出方法と文献数

医学中央雑誌 WEB Ver.4 (1983 ~ 2010 年) を用い、キーワードを「OSCE」「客観的臨床能力試験」として 2011 年 11 月に検索した。分類は「看護」として検索したところ、129 件の文献が検出された。次に、129 件の文献を「原著論文」に限定したところ、24 件の文献が検出されたが、本文献検討は本学への OSCE 導入の是非について検討する基礎資料とすることを目的とするため、同じ教育背景にある大学での教育を扱っている論文、および OSCE 活用の実際を取り扱っている論文 5 件<sup>3)~7)</sup> に絞り、本研究の分析対象とした (表 1 参照)。

表 1 分析の対象とした文献一覧

対象文献	論文タイトル	発表年
清水裕子ら <sup>3)</sup>	基礎看護技術実技試験における SP を導入した OSCE の試み	2002 年
内田倫子ら <sup>4)</sup>	成人看護学における OSCE の試み	2008 年
庄村雅子ら <sup>5)</sup>	成人看護学における OSCE を活用した看護技術の主体的習得に関する学び	2009 年
多賀昌江ら <sup>6)</sup>	学生から見た客観的臨床試験 (OSCE) トライアルの意義	2009 年
高橋由紀ら <sup>7)</sup>	全領域の教員参加による OSCE 実施の評価 - 看護系大学生の認識からみた OSCE の意義	2009 年

##### 2. 文献検討の手順

個々の文献を、自ら作成したフォーマットに基づき整理し、(1) OSCE の活用目的、(2) OSCE 活用時期、(3) OSCE 実施時の患者役と評価者、(4) OSCE の設定課題、(5) OSCE の具体的展開と評価方法、(6) OSCE 実施の効果、(7) OSCE 実施における課題について抽出・分類し、文献を調査した。

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

### 3. 分析方法

(1)OSCEの活用目的, (2)OSCE活用時期, (3)OSCE実施時の患者役と評価者, (4)OSCEの設定課題, (5)OSCEの具体的展開と評価方法, (6)OSCE実施の効果, (7)OSCE実施における課題について分類し, それぞれ選択した項目同士を考察の視点とし, 内容分析した。

## 結 果

### 1. 研究論文の年次推移 (図1)

日本の看護基礎教育におけるOSCEを試みた研究論文の年次推移について図1に示した。原著論文24件の年次推移のうち, 1983年～2002年は0件であった。

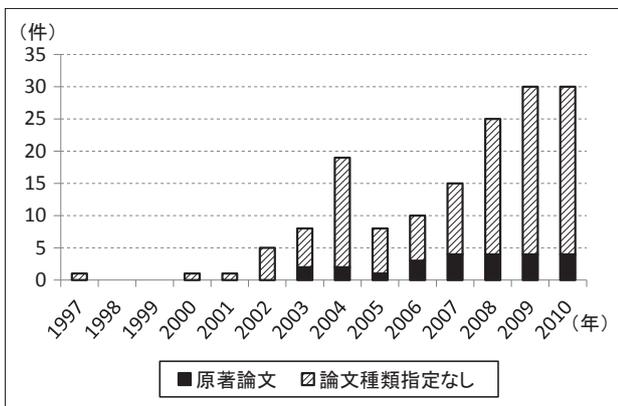


図1. 研究論文の年次推移

ここで, 本研究の対象となる論文は5件と少ない論文数であったため, 原著論文という限定を外し, 検索した129件についても同様に図1に示す。1983年～1996年は0件であった。種類別に研究論文を見てみると, 大多数が会議録であり, 次に解説, 原著論文という件数順であった(図2参照)。

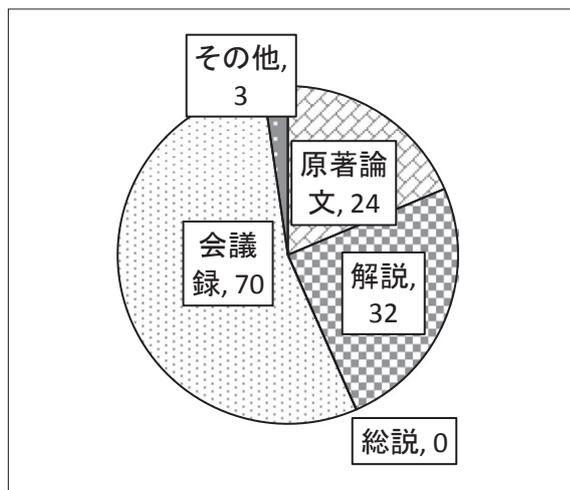


図2. 研究論文の種類 (N=129)

### 2. OSCEの活用目的 (表2参照)

OSCEを活用する目的は, 論文ごとに多様な表現があるが, 「臨床能力の測定」<sup>3),6),7)</sup>, 「対象理解と技術の根拠の確認」<sup>4)</sup>, 「看護実践能力の主体的習得」<sup>5)</sup>の3つであった。

### 3. OSCEの活用時期 (表2参照) (複数学年での活用を含む)

本研究の分析対象文献は5件であるが, 高橋らの文献<sup>7)</sup>には2学年での活用を含むためここでの全件数は6件となる。

OSCEの活用時期は, 1年生の活用が2件, 2年生の活用が0件, 3年生の活用が2件, 4年生の活用が1件, 不明1件であった。

5件が実習前に実施しており, 1件のみ実習後での実施であった。

表2 OSCEの活用目的と実施時期

対象文献	活用目的	実施時期
清水裕子ら <sup>3)</sup>	臨床能力測定	1年生(実習前)
内田倫子ら <sup>4)</sup>	対象理解と提供する技術の根拠の確認	不明(実習前)
庄村雅子ら <sup>5)</sup>	看護実践能力の主体的習得	3年生(実習前)
多賀昌江ら <sup>6)</sup>	専門領域単位で修得した技術の統合を図る。	1年生(実習前)
高橋由紀ら <sup>7)</sup>	領域別実習に向けて実践能力を高める。自己の課題を明確にする。	3年生(実習前)
	実習を通して習得した技術を統合して再学習し4年間の看護技術習得度を評価する。	4年生(実習後)

### 4. OSCE実施時の患者役と評価者 (表3参照)

患者役は, 模擬患者3件(外部機関委託による模擬患者1件, 一般市民による模擬患者1件, 不明1件), 学生2件であった。

評価は5文献とも教員が行っており, そのうち1件は師長や看護師, 1件は患者役も含まれていた。患者役は全員がフィードバックを行っており, 自己評価を行っているのは2件であった。

### 5. OSCEの設定課題 (表4参照)

課題は, 実際に行う課題数や選択の有無などから整理すると4つに分類された。その内訳は, 「選択肢のある単一課題」が2件, 「選択肢のない単一課題」, 「選択肢のない複数課題」, 「選択肢のある複数課題」のそれぞれが1件ずつの報告であった。すべての課題において状況設定と看護技術が課題として組み込まれており, 看護技術の内訳は生活援助技術と診療の補助技術であった。

### 6. OSCEの具体的展開と評価方法 (表3参照)

事前の課題提示があったのは4件で, 不明が1件である。課題提示後は, 実習室にて学生が自主的に練習し

表3 具体的展開と評価方法

対象文献	具体的展開	患者役	時間	評価方法	評価者
清水裕子ら <sup>3)</sup>	1週間前に試験の内容や方法、評価方法を告知→当日、患者の状況設定文を判読し実施→試験終了後、自己評価及び模擬患者からのフィードバック→評価	模擬患者	15分	試験前に担当教員と模擬患者全員による評価に関する検討会を行う。4段階の評価尺度を用いている。評価項目は精神運動領域10項目、情意領域8項目。模擬患者によるコメントも付記。試験終了後、担当教員と全員の模擬患者で評価の検討会を行い、後日学生にフィードバック。	教員 模擬患者
内田倫子ら <sup>4)</sup>	技術項目を予告し自己練習→当日、学生は2人1組となり、患者役と看護師役を分担して実施→試験終了後、自己評価、患者役からの評価、教員評価をフィードバック→評価	学生	15分	評価項目：交換前の準備～片づけ・報告までの合計40項目について3段階評価。合格基準と再試験条件：実習の進行と共に実習場において要求される技術レベルを考慮して実習クールによる重みづけを導入。評価点数は、1～4クールは48点(60%)以上、5～6クールは56点(70%)以上、7～8クールは60点(75%)以上を合格とした。評価は点数のみでなく患部の安静不保持や転落につながるような場合は危険行為として不合格、時間内に終了できなかった場合も不合格とした。	教員
庄村雅子ら <sup>5)</sup>	約1ヶ月間の自己練習→当日、シナリオをくじ引きし、4技術のうち、実施する1技術と状況設定の情報が与えられる→試験終了後、患者役の先輩と教員からフィードバック	学生	10分	具体的記載なし	教員
多賀昌江ら <sup>6)</sup>	(事前は記載なし)→当日、学生は課題把握1分、実施7分、フィードバック1分30秒、移動30秒で展開→1課題につき教員1名(評価者は2名)と模擬患者からフィードバック	模擬患者	7分	具体的記載なし	教員
高橋由紀ら <sup>7)</sup>	年度初めにOSCEについて説明→OSCE実施3ヶ月～1ヶ月前に、教員は患者設定、必要物品、試験配置図、評価表、評価マニュアルなどを作成し、評価担当者を含めて検討し修正→学生には実施3ヶ月前に10項目の課題を提示し自己練習→当日、試験は5課題を2ルート、10ステーションで実施。試験室に入室後、実施5分、フィードバック1分、移動1分で展開→試験終了後、全体講評として、各課題担当者が10分程度で、課題別の評価の視点と実施上のポイントを伝える→評価	模擬患者	7分	評価者は各試験場に2名配置。その日のうちに合否の連絡を伝え、不合格者には、1週間後に再OSCEを行う。評価マニュアルに沿って評価した2人の評価者の点数の平均点を100点満点に換算し、5つの課題の点数の合計点数を学生の実践能力として評価。	教員 師長 看護師

OSCEに備えていた。1課題につき所要時間は、15分が2件、10分が1件、7分が2件であり、複数課題を課している場合は7分と短く、単一課題を課している場合は10分以上の時間が配分されていた。

評価方法について、2件は具体的な記載がなかったが、3件についてはいずれも評価表を作成し段階評価を行っていた。成績評価は全ての文献において教員が行っており、そこに看護師長や看護師といった看護専門職者や事前に評価方法に関して検討を行った模擬患者が加わることもあった。合否判定には複数の教員の平均値をとる、模擬患者のコメントも付記する、点数以外にも危険行為、制限時間超過等を不合格基準に加える等の方法がとられていた。また、内田ら<sup>4)</sup>は実習の進行と共に実習場において要求される技術レベルを考慮し、実習クールによって合格基準に異なる重みづけをしていた。

#### 7. OSCE実施の効果(表5参照)

OSCE実施の効果は全ての文献において自由記述や

半構造化面接法によって回答を求めたものであった。OSCE実施の効果について、学生の態度に関するものとして、多賀ら<sup>6)</sup>は「学生に良い緊張と好奇心を高め、看護を志向する態度の向上へと動機づけが強化し、その後の実習においても、患者と関わる時にはフィードバックで指摘された内容を意識して実習に臨んでいた」と報告していた。また、清水ら<sup>3)</sup>は、「学生はOSCEを実施することで、OSCEに向けた学習努力への充足と成果の実感を得ることができる」と報告していた。

他に、学生の学びに関するものとして、内田ら<sup>4)</sup>は「学生の苦手とする技術の確認ができ、臨地実習での留意点が明瞭になった」ことを、多賀ら<sup>6)</sup>は「評価のフィードバックによる教育効果及び患者役での対象理解と援助を受ける立場での技術評価ができた」ことなどの教育効果を報告していた。

5件の文献から学生にとってOSCEを実施することは、自己を振り返る機会となり学びの機会として有用<sup>6)</sup>,

表4 OSCEの設定課題

対象文献	課題数	分類	課題内容
清水裕子ら <sup>3)</sup>	課題が設定されており、その中で状況設定が5つに分かれている。試験時に学生が無作為に1つを抽出	選択肢のある単一課題	【女性患者の床上排泄介助及びコミュニケーション】 状況設定例： ①40歳代女性、腰痛症で入院し安静を求められている患者であり、初めて体験するベッド上排泄を依頼される。 ②30歳代の急性肺炎で入院中の患者であり、激しい悪寒戦慄とともに、頭痛、眩暈、嘔気がある。点滴終了後排泄援助を求められる、等
内田倫子ら <sup>4)</sup>	1課題	選択肢のない単一課題	【冠動脈造影検査（ベッド上安静・持続輸液中）の成人期患者の、尿のとりこぼしによる汚染寝衣と横シートの交換】
庄村雅子ら <sup>5)</sup>	4技術のうち、1つをくじ引きで選択し実施	選択肢のある単一課題	①点滴静脈内注を受ける患者の輸液管理法 ②血糖の不安定な状態にある患者の簡易血糖測定法 ③高血糖状態にある患者のインスリン注射法 ④錠剤と散剤の経口与薬法 シナリオ例③：【高血糖状態にある患者のインスリン注射法】山田花子、40歳、女性。高血糖のため昨日入院し、食前血糖値に応じた指示インスリン量をその都度、指示箋で確認して血糖値をコントロールしています。昼食前の血糖値は360mg/dlで、インスリン注射を行うことになりました。
多賀昌江ら <sup>6)</sup>	3課題	選択肢のない複数課題	具体的内容の記載なし。
高橋由紀ら <sup>7)</sup>	10課題のうち学生は2グループに分かれ1人5課題を実施	選択肢のある複数課題	コミュニケーション、胸部のフィジカルアセスメント、静脈内点滴注射施行患者への援助、小児の寝衣交換、片麻痺患者の車椅子移乗、等 腹部のフィジカルアセスメント、尿閉患者の導尿、乳児の家庭訪問、胎児心音聴取、術後の初回歩行、等

表5 OSCE実施の効果

対象文献	効果	測定/確認方法
清水裕子ら <sup>3)</sup>	・実習前に行った場合、学生に良い緊張と好奇心を高め、満足度の高い到達評価が可能	選択肢（9項目）と自由記述（2項目）からなる質問紙調査
内田倫子ら <sup>4)</sup>	・学生の苦手とする技術の確認ができ、臨地実習での留意点が明瞭になった ・評価のフィードバックによる教育効果 ・患者役での対象理解と援助を受ける立場での技術評価ができたこと	学生の自己評価の自由記述より
庄村雅子ら <sup>5)</sup>	・他の技術試験に比べ、試験があること、試験が初対面の相手を対象に技術を実施しなければならないことが、試験までに学生自身が積極的な学習者になることを促していた。 ・試験前の反復練習を通じた学生間および自己評価を契機として自らの学びの意味づけが繰り返され、自らの課題を見出すことにつながっていた。 ・こうした学びの体験は、看護実践技能を正確に身につけることに有用であった。 ・リアルなシミュレーションの中では、単に手順を暗記するだけでなく、患者の安全と安楽の保証に対する看護師の責任の重さを実感できる成果へと繋がっていた。 1. OSCEを活用した看護技術の主体的獲得に関する学びは【OSCEに向けた学習努力への充足と成果の実感】など5つに分類された。 2. 5つの分類は、【OSCEに向けた学習努力への充足と成果の実感】、【自己の学びを振り返り自ら解決の糸口を見出す】そして【学んだことを自分のものにする】へと力をつけるよう発展し、単に技術を習得することを超えて、【看護を志向する態度の向上】へと動機づけが強化されていった。OSCEでの主体的学びの獲得プロセスを通して、学生は学びの志向や学びたい欲求が高まり、【OSCEの改善への要望】も多く抱くよう変化した。	自由記述による質問紙調査（3項目）
多賀昌江ら <sup>6)</sup>	・自己を振り返る機会となり、学びの機会として有用 ・フィードバックをその後の基礎看護学臨地実習で患者と関わる際に活用することにより、学生はOSCEトライアルの経験は実習に役立つと認識していた。 ・複数の教員による評価は、実技試験により客観的で、自己の成長につながると学生は認識した。	半構成的面接
高橋由紀ら <sup>7)</sup>	・OSCEを受けた学生の約8割がOSCEは臨地実践力を身につけるために役立つと回答 ・自己の技術力の向上に役立つことは、相互学習や自己学習であったと回答した学生が7～8割おり、主体的な学習や技術練習が有意義であると認識していた。	選択肢と自由記述からなる質問紙調査

満足度の高い到達評価が可能となる<sup>3)</sup>、実習に役立つ<sup>6),7)</sup>、自己の成長につながる<sup>6)</sup>、主体的な学習や技術練習が有意義である<sup>7)</sup>、との効果が報告されていた。

8. OSCE実施における課題（表6参照）

課題として取り上げていた内容は、OSCEの設定課題

に関するものが3件<sup>3),6),7)</sup>、評価教員や患者役といった人的課題が2件<sup>3),5)</sup>、実施時間が2件<sup>3),6)</sup>、評価方法<sup>7)</sup>が1件であった。また、実習につながるように体系的な教育プログラムの構築を課題とする報告が2件<sup>4),5)</sup>であった。

表6 OSCE実施における今後の課題

対象文献	OSCE実施における今後の課題
清水裕子ら <sup>3)</sup>	難易度や評価教員の配置、試験時間には更に工夫が必要
内田倫子ら <sup>4)</sup>	臨地実習中・後の技術習得状況や臨地実習評価と併せてOSCE活用の評価をすることで、教育システムとしての構築をしていくこと
庄村雅子ら <sup>5)</sup>	<ul style="list-style-type: none"> <li>臨地にも適用するような看護実践能力自体やその主体的習得を促すよう、教育プログラムを評価、修正し、学生の看護実践能力を高める、より系統的な教育プログラムを構築すること</li> <li>人や費用負担が大きく、組織的に取り組むことも課題</li> </ul>
多賀昌江ら <sup>6)</sup>	OSCEの運営上の在り方として、学生がより実習に近い状態で看護実践を行い、公正な評価を受けるためにはOSCE運営時の課題実施時間、課題内容は、学生が緊張感を伴って参加していることを考慮して設定する必要がある。
高橋由紀ら <sup>7)</sup>	課題の客観性や、教員間の評価の違いの有無など、評価に対する信頼性の検討等

評価基準を統一し、課題の客観性や難易度、試験時間など評価に対する信頼性の検討などの課題、さらに、OSCEを含めたシミュレーション教育、問題解決型学習は、学生の個別の能力を伸ばす反面、人や費用が講義や通常の演習よりも多く必要になるため、領域単独で実践的な演習を充足させていくことには、人的にも費用的にも限界があることが報告されていた。

## 考 察

### 1. 研究論文の年次推移

医学中央雑誌の1983年から2010年における看護分野の原著論文を対象としたところ、2003年以降に数件ずつ散見されるようになってきた。原著論文に限定しなければ1997年に1件であったものが、それ以降数年で増減はあるものの、2005年以降増加してきている。また、論文種類別では会議録が多く、論文としての公表が少ない現状がわかった。このように、近年OSCEを活用してきている背景には、先述した通り、看護実践能力の養成における課題として看護師等にはこれまで以上に高い能力が求められていることが考えられる。

我が国で先駆的に看護分野におけるOSCEを活用している大学として札幌市立大学がある。「質の高い大学教育推進プログラム20年度-22年度」事業で取り組まれた札幌市立大学の「学年別OSCEの到達度評価と教育法の検討」の最終報告書<sup>8)</sup>が発行されているのは平成23年3月であり、今回の分析対象は1983年～2010年までの原著論文としたため、本研究の対象文献に入っていない。2011年1月から8月までの間で本研究と同様条件（原著論文と限定）で検索すると、すでに2件の報告<sup>9),10)</sup>があることや、原著論文と限定をせず検索すると、近年増加

傾向にあることなどから考えると、今後OSCEに関する論文が増加するものと予測される。

### 2. OSCEの活用目的と活用効果

OSCEの活用目的には「臨床能力測定」、「対象の理解と技術の根拠の確認」、「看護実践能力の主体的習得」の3つが報告されていた。OSCEは形成的評価にも、総括的評価にも用いることができ<sup>1)</sup>、実際に「臨床能力測定」を活用目的として1年生から4年生に渡り、活用されていた。さらに、OSCE実施の効果は他にもあり、OSCE実施時には事前に課題が提供されることから、学生は学生同士教えあったり、調べたりと事前準備をしていた。庄村ら<sup>5)</sup>は、「試験前の反復練習を通じた、学生間および自己評価を契機として自らの学びの意味づけが繰り返され、自らの課題を見出すことにつながっていた。こうした学びの体験は、看護実践技能を正確に身につけることに有用であった」と報告している。また、内田ら<sup>4)</sup>は「患者役での対象理解と援助を受ける立場での技術評価ができた」、「学生の苦手とする技術の確認ができ、臨地実習での留意点が明瞭になった」など、効果として対象理解と提供する技術の根拠の確認があった。これらのことから、OSCEは活用目的に合致して臨床能力測定だけでなく患者の立場を考え、患者に提供する看護技術の根拠を学び、さらには、これらの看護実践能力を主体的に習得することができるといえる。

また、OSCEを「臨床能力測定」という目的で実施されていた時期は1年生の実習前、3年生の実習前、4年生実習後であった。その他、「看護実践能力の主体的習得」を目的として実施されていたのは3年生実習前であり、「対象理解と技術の根拠の確認」を目的として実施されていた学年は不明だが、実習前に実施されていた。このように目的に応じて、活用時期は異なっていたが、形成的評価を行う時期は実習が一つの要因となっていることが分かった。

### 3. OSCEの設定課題と展開方法

OSCEの設定課題に関連して考えると、「選択肢のある単一課題」は、年代や疾患、状況等の設定がなされており、OSCEを受ける1年生は、1年生でありながら状況設定が複数であり、状況判断能力を試される試験内容となっていることがわかる。一方、課題数に関連して考えると、1年生には複数課題、単一課題がそれぞれ1件ずつ報告されており、また3、4年生においても複数課題、単一課題がそれぞれ1件ずつ報告されていた。学年によって課題数に変化は見られなかったが、選択肢の有無から考えると3、4年生は3件とも選択肢があったことから高学年になるほど、事前準備で自主的に取り組む看護技術の数が多く、OSCE実施時に提示された課題に対し、幅広い看護技術活用力を問われるものであるように考える。庄村らが<sup>5)</sup>、OSCEを実施することで、患者

の安全と安楽の保証に対する看護師の責任の重さを実感できる成果へと繋がっていたことは大きな教育効果の一つであると述べていることから、OSCEを実施することで早い段階から将来看護専門職としての自覚を持ち、看護実践能力が培われるものと考え。医学教育では、手技や問診に対して比重が重く<sup>11)</sup>あるが、看護教育では様々な世代の人間を対象とし、看護技術の提供だけでなく、その際の対象に応じた看護を行うことが求められている。今回分析したOSCEもすべてにおいて状況設定のある看護技術を課題としており、そのため看護実践能力の中身は看護技術の習得のみでなく、対象理解を含め様々な状況を理解し、その上で実践できる能力を測定する内容であった。看護教育でOSCEを用いる際に必要な点としては、課題の中に看護技術だけでなく様々な状況の設定を見越した内容でなければならないといえる。

#### 4. OSCEの評価方法

本文献検討から、患者役は全員がフィードバックを行っている実状が分かった。当日の患者役からフィードバックで、多賀ら<sup>6)</sup>は、学生からのインタビュー結果として「フィードバックは教員だけでなく、SPも行うことが効果的だった」、「SPの肯定的フィードバックによって看護実践の喜びを感じていた」、「フィードバックから自己の新しい発見があり、フィードバックを実施の場で受けたことが良いと認識していた」などの効果を記述している。これらのことから、評価者だけでなく患者役からのフィードバックが効果的ではないかと示唆された。大学ら<sup>12)</sup>は、一般市民のボランティアによる模擬患者は、学生を全体的に捉え情意領域を多く評価する傾向があり、現任看護師による標準模擬患者は学生の技術を分析的に捉え精神運動領域を多く評価する傾向があると述べている。今回の文献検討から、成績評価は教員のみならず看護専門職者や事前に評価方法に関して検討を行った模擬患者が加わることもあったことから、評価者および模擬患者を誰に依頼するかといった検討も必要となってくる。

#### 5. OSCE導入の可能性について

OSCE導入に関しては先述の通り、自己を振り返る機会となり学びの機会として有用、自己の成長につながる、主体的な学習や技術練習が有意義である、などの効果が報告されていたことから、OSCEを実施することは自律した学生を育成する上でも有効であり、本学の教育目標である「自己教育力」に合致した教育法の一つであると考える。

しかし、OSCEを実施する上では課題内容、評価教員や患者役、実施時間や評価に関することなどの様々な課題が存在していた。そして、本学でも講義、演習、実習といった一連の教育プログラムの構築が課題として考えられることから、領域別でなく大学を挙げて取り組む姿

勢が必要となってくる。

今回、本学においてもOSCE導入の是非について検討するため、その基礎的資料として、看護教育分野におけるOSCEの現状を分析したが、今回対象とした文献は5件と少なく、OSCEの全貌を把握するには十分とは言えない。今後さらに普及されるであろうと予測されるOSCEについて引き続き検討し、本学に導入する際には、示唆された効果と課題を踏まえて、その活用の仕方について独自に考えていくことが課題であると考え。

### 引用文献

- 1) 伴信太郎 (1995) : 客観的能力試験—臨床能力の新しい評価法—, 医学教育, 26(3).
- 2) 文部科学省 (2011.12.22) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告 (平成23年3月11日), [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm).
- 3) 清水裕子, 大学和子, 野中静 (2002) : 基礎看護技術実技試験におけるSPを導入したOSCEの試み, 聖母女子短期大学紀要 (0917-9119) 15号, p.53-63.
- 4) 内田倫子, 土屋八千代, 赤星成子他 (2008) : 成人看護学におけるOSCEの試み, 南九州看護研究誌 (1348-1894) 6巻1号, p.55-61.
- 5) 庄村雅子, 佐藤幹代, 高橋奈津子他 (2009) : 成人看護学におけるOSCE (Objective Structured Clinical Examination) を活用した看護技術の主体的習得に関する学び, 東海大学健康科学部紀要 (1347-4162) 14号, p.39-45.
- 6) 多賀昌江, 樋之津淳子, 福島眞理他 (2009) : 学生から見た客観的臨床能力試験 (OSCE) トライアルの意義, SCU Journal of Design & Nursing (1881-9427) 3巻1号, p.27-34.
- 7) 高橋由紀, 浅川和美, 沼口知恵子他 (2009) : 全領域の教員参加によるOSCE実施の評価—看護系大学生の認識から見たOSCEの意義—, 茨城県立医療大学紀要 (1342-0038) 14巻, p.1-10.
- 8) 中村恵子 (2011) : 平成20-22年度「質の高い大学教育推進プログラム (教育GP)」採択事業, 学年別OSCEの到達度評価と教育方法の検討, 最終報告書.
- 9) 近藤智恵, 市村久美子, 伊藤香世子他 (2011) : OSCEにおける教員間の評価の差異と課題, 茨城県立医療大学紀要, 16巻, p.1-11.
- 10) 川崎タミ, 横井郁子, 角田ますみ他 (2011) : 実習直前の看護OSCEの結果を用いて測定した実践力と、学生の心的状況の関連について, 東邦看護学会誌, 8号, p.10-16.
- 11) 日本医学教育学会編 (2005) : 基本的臨床技能の学び方・

教え方－ Essential Minimumと OSCE, 第1版, 南山堂, p.121-152.

- 12) 大学和子, 西久保秀子, 土蔵愛子 (2006): 基礎看護学における客観的臨床能力試験 (OSCE) の実践  
ボランティアによる模擬患者と現任看護師による標準模擬患者との評価から, 聖母大学紀要 (1880-1463) 2号, p.27-34.

---

## 要 旨

本学へのOSCE導入の是非について検討するため、その基礎的資料として、日本の看護学士課程におけるOSCEを活用した教育方法について文献検討を行い、現状と課題を明らかにした。キーワードを「OSCE」「客観的臨床能力試験」、分類は「看護」として検索したところ、129件が検出された。次に、「原著論文」に限定すると24件が検出されたが、本文献検討は本学におけるOSCE導入の是非についての検討資料とするため、同じ教育背景にある大学教育を扱っている論文、及びOSCE活用の実際を取り扱っている論文5件に絞り、本研究の分析対象とした。

研究の動向では129件のうち、原著論文は2003年に、原著論文以外では1997年に初めて検出され、以後は数年で増減はあるものの2005年から増加傾向にあった。

詳細分析の対象とした5件の論文から、OSCE活用時期は殆どが実習前であり、学生や模擬患者が患者役となり、評価には教員だけでなく看護職の参加や患者役からのフィードバックも参考にされていた。OSCEを実施することによって、学生の態度と学びに関する効果が報告されていた。また、OSCE実施における課題は、評価基準の統一、課題の客観性や難易度などが挙げられており、人的・費用的限界も報告されていた。

今後さらに普及されるであろうOSCEについて引き続き検討し、本学に導入する際には、示唆された効果と課題を踏まえて、その活用の仕方について独自に考えていくことが課題である。